HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	体験としての自閉症スペクトラム障害 : 成人期を生きる当事者の「パーソナリティ（personnalité）」の発展に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	木谷, 岐子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12747号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66147
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Michiko_Kiya_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：　木　谷　岐　子

学位論文題名

体験としての自閉症スペクトラム障害
－成人期を生きる当事者の「パーソナリティ(personnalité)」の発展に着目して－

本論文の題目を、「体験としての自閉症スペクトラム障害」としている。それは、当事者のあり方を、客観的に記述できる症状や特徴からのみ捉えるのではなく、そうした特徴と共に、彼ら自身がいかに生きようとしているのか、その全体性を理解する、新たな視点の開拓を目的としたことによる。

本論文の対象は、知的な遅れを伴わない自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）の成人当事者で、ASD に関する情報や支援技術が十分に提供されていない時代に、乳幼児期、児童期、思春期を過ごしてきた人々である。青年期から中年期への移行の過程で、彼らは診断後をいかに生きようとするのか。本論文は、そうした彼らの体験のあり様に着目した。

また、本論文は、先行する精神病理学や発達心理学の理論仮説を参考に、ASD 当事者が抱える「自分」という意識の様相に着目した。本論文で扱う「自分」とは、内的体験を意味づけ、行動を組み立てる意識のことである。その意識は、他者と意味世界を共有する体験を蓄積する中で形成される。そして、この「自分」という意識は、生活する世界との関わりのあり方全体を示す、「パーソナリティ(personnalité)」(Wallon,H.)の中核となって機能していると定義した。

序章では、ASD 当事者の自己の領域を扱った先行研究を概観した。数量的研究や横断的研究は、一義的で明確な関係性を捉えることができるが、一人の人の全体像の描出には限界があった。一方、インタビューを行い、当事者に「自分」について語ってもらう調査方法の可能性が拓けてきたことが確認された。筆者は、素材となるデータが、当事者と調査者との「全身活動的」(森岡)な共同行為によって語り出されたものであるからこそ、文字化に耐え、より本質的な解釈と分析が可能になると考えた。本論文は、調査協力者と筆者との「対話」を基本的調査方法として用いている。このように、本論文は、多義的なデータを扱うことによる限界を内包する。よって、数量的な研究成果と相補関係を結ぶ研究として位置づくものである。

第 1 章(研究 1)は、成人期を生きる ASD 当事者が抱える「自分」という意識の様相を捉えることが目的である。複雑で難解な対象を、実証的に捉えるため、複数の人の語りの中に、一定程度、共有できる骨格を見出す作業を経る必要があると考え、ASD の成人当事者 10 名にインタビュー調査を実施した。分析方法は、Modified Grounded Theory Approach(以下 M-GTA)を選択した。分析の結果、成人後に ASD と診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセスが導出された。プロセスは、「おぼろげな自分」を「抱えてきた自分」が、なんとか他者と関わって生きようとする中で動き出していた。彼らは、「身体の訴えをきき流す」ことで「苦悶のサイクル」を巡り、「身体の訴えをきき入れる」ことで「調整のサイクル」へと転じ、「人の中で生きられる自分の形を探す」試みへと導かれていた。しかし、「人の中で生きよう」とするゆえに、再び「“できなさ”の中に自分を垣間見る」こととなり、「苦

悶のサイクル」に戻ってしまうこともある。こうした行きつ戻りつの巡りの中で、ASD 当事者の「自分」を尋ね出すプロセスは続いていた。

続く、第 2 章(研究 2)では、研究 1 から得られた骨格を肉づけ、個別性への理解を深めていくことを目的とした。一人の女性のインタビューデータを、ライフストーリーという観点から捉えた。結果、三つの苦悩が各年代を貫いて示された。それは、(1)刺激でいっぱいいっぱいになる「自分」、(2)他者との境界線が曖昧になる「自分」、(3)他者と“何か”を共有できていない「自分」、であった。さらに、「自分について他者に語る物語」(森岡)を持てずにきた苦悩が示された。

研究 1 と研究 2 の関係は、並列的かつ相補的関係にある。二つの研究成果から、ASD の人が「自分」を尋ね出していくプロセスが、個人の人生という時間軸の中で、どのような体験として語られるのかが具体的に描出された。さらに、ASD の成人当事者が、診断後を生き抜いていく鍵は、「繋がりを感じられる他者」と関わりながら、「自分について他者に語る物語」(森岡)を育み、安定させていくことにあると考察した。この考察から、ASD のピア同士は、「対話」を通し、互いをどう生かし合い、支え合っているのか、という次なる課題が見出され、第 3 章(研究 3)へと展開した。

研究 3 では、ASD の女性当事者が集う、セルフヘルプ・グループ(以下グループ)を 4 年間調査し、音声データを、二つの方法を用いて分析した。一つは、会話分析の手法を援用し、体験が生成されるまさにその時の様相を明らかにした「対話の分析」である。もう一つは、M-GTA の手法を援用し、当事者がグループという場を、どう意味づけているのかを明らかにした「語りの分析」である。結果、「対話の分析」からは、(1)馴染む、(2)ずれる、(3)ずらす、というやり取りがなされていることが示された。「語りの分析」からは、メンバーとのやり取りが、グループ終了後も、メンバーそれぞれの「自分」の内側で続いていき、日常の出来事に対峙する支えとなっていることが示された。こうした成果を踏まえ、研究 3 では、メンバーがグループへの参加を継続する中で、「自分」という意識を培っていく様相について考察した。

本論文では、上述してきた三つの研究を通し、ASD の成人当事者が抱える「自分」という意識の様相を、彼らの生活世界や、人生行路と共に捉えることを試みた。その結果として、本論文は、ASD の成人当事者が、「パーソナリティ(personnalité)」を発展させていく可能性と、その様相の描出に到達できたと考える。そして、彼らの「パーソナリティ(personnalité)」の発展を促す契機となる体験として、以下 3 点を見出した。それは、(1)「自分」の身体性と繋がりをもつ体験、(2)診断告知によって社会と意味世界を共有する体験、(3)繋がりを感じられる他者と出会う体験、である。また、本論文の対象者が、いくつかの狭間を生きる人たちであることについても考察した。“普通”でないのならば“異常”とされ、その狭間に存在する人に対応し得なくなっている現代社会にあって、彼らは、中年期という、さらなる狭間を生きる人たちであった。本論文では、彼らがその狭間において、「人の中で生きられる自分の形を探す」試みを、ひたむきに続けている様相を描出した。そして、青年期から中年期を生きる ASD 当事者の、そうしたあり方の中に、世代に継承されるべき「生産性(productivity)」や「創造性(creativity)」(Erikson,E.H)が包含されていると考察した。

本論文は、質的データの分析方法を組み合わせ、あるいは援用することで、研究目的と方法論との連動を図り、多面的に「体験としての ASD」を描き出すことに取り組んだ。こうした、方法論の選択と利用の経緯は、本論文の成果の一つと考える。しかし、姿勢や表情など、言語化されない自己表現のデータ化には及ばなかった。それが、本論文の限界の一つと言える。今後、さらなる方法論の検討、開発が課題である。